

エデンへ 宇津峠

宇津峠は朝日連峰の支脈の峠である。この山地を境に、西に流れやがて荒川となつて新潟の海へと注ぐ荒川水系、北西へ流れ最後酒田にたどりつく最上川水系の分水嶺となつている。「ウツ」とは、アイヌ語で「川もしくは沢の脇にある」という意味。先住民のアイヌ達も、この峠が分水嶺であることを意識していたのかもしれない。

宇津峠は、鷹巣峠から数えて12番目の峠だが、坂は急で標高も高く最後の難所となつている。

「こんなつらい峠の旅は、もう、これでおしまいね」

自分を励ましながら、馬にのつて宇津峠の石畳を一步一步のぼっていく。天気がよく、時折さわやかな風が吹き上げてくる。雨が降りしきる夜中に、黒沢峠を越えたのはたった2日前。あの時に比べれば、ずうっとました。濡れた石畳で、足を滑らすこともない。頂上にたどり着いたバードは、初めて見る置賜盆地を見てこう書いている。

私は、うれしい日光を浴びている山頂から、米沢の気高い平野を見下ろすことができ、嬉しかった。米沢平野は、日本の花園の一つである。木立も多く、灌漑もよくなされ、豊かな町や村が多い。壮大な山々を取り囲んでおり、南端には半月半ばでさえ、白い雪をいただく山脈が走っている。

バードは、置賜に広がるエデンの園と飯豊連峰をかわるがわるに見た。



宇津峠東側の、急斜面を下りたバードを、落合の地蔵さまが優しく出迎えてくれた。

イトーが話しかけてくる。

「この地蔵さま、腰の痛みを直してくれるありがたい仏さまだそうですね。バードさんの背中痛みも治してくれるかもしれません。私が押andoきます」

キリスト教の牧師の娘であるバードは、もちろん地蔵さまを押しだりはしない。ただ、自分の背中が痛み、苦しみますとイトーは自分が死んでしまうので

はないかと思ひ、ひどくあわてふためき、やがて不愛想な態度になる。それが不愉快でたまらなかつたのだが、実は心配してくれていたのだ。

「ありがとう、腰の痛みと背中への痛みはちよつと違ふからお地藏さまも困るかも。でも、あなたのその気持ちがうれしいわ」

昼過ぎに、手ノ子という村についた。バードは、駅舎の縁側に腰をかけ、次の馬が見つかるのを待った。そこは大きな店になっていて、高さ80センチほどのテーブルが並んである。店の主の孫がその上に座布団をひいて、眠りこけていた。

イトーはこの店で、ぞつとするようなものを7皿も食べた。餅に納豆をかけた気持ちの悪い食べ物だ。納豆は、まず臭い。臭いだけでなく、ぐちゃぐちゃでぬるぬる、おまけに糸をひいている。まるで腐った食べ物そのものではないか。それをイトーはツルツルと一気に飲み込んでいく。一皿に餅が5個乗っているから、7皿で合わせて35個の餅を食べたことになる。

「イトー、よく食べるね。あんまり食べるとバカになるわよ」

「いやー、餅を食べる人は粘り強く力持ち（モチ）で、家、村、国をお金持ち（モチ）にする、なんていう言い伝えがあるそうですよ」

バードにはもちろん、この駄洒落は通じない。外国人が来たと聞いて、駅には人が集まり始めた。



　　バードには酒、お茶、ごはん、黒豆が出てきた。黒豆は甘く煮てあり、たいそう、うまかった。おんなじ豆なのにどうして納豆みたいな変なものを作るんだろう。

　　雨が上がると、月の太陽は強い。縁側の日陰を選んで座っていても暑い。主はバードに帳面を渡し、英語で自分の名前を書いてくれるよう頼んできた。汗をかきながら、毛筆でアルファベットを書いていると、主の娘がうちわであおいでくれる。その風が気持ちよい。

　　文字を書き終えても、一時間以上あおぎ続けてくれた。料金を渡そうとする  
と、外国人を見るのは初めてです。、名前まで書いてもらってお金をもらうな

んで、そんな恥ずべきことは絶対にできませんという。そればかりか、お菓子と自分の名を書いた扇子まで土産にくれた。

バードはその代わりに、イギリスから持ってきた針をあげた。外国人が来たと聞いて、一目見ようと集まって来た村人たちに、主はその針を回し見させている。

馬がやってきた。

「ありがとうございます。日本を思い出すたびに、みなさんのしてくれた親切を忘れることはないでしょう」

心をこめて感謝の気持ちを伝えたバードはイトーの手を借りて馬に乗り込んだ。

「おー！」

女性が、しかも外国人の女性が馬に乗るのを初めてみた群衆から、驚きの声が上がった。